

2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 京都市 】

学校名【 京都市立日吉ヶ丘高等学校 】

1 実践テーマ	I・III・V
2 実施対象者 (学年・人数)	2年 7クラス 235名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 () ② 行事名 (保健人権学習) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> ・車椅子体験や交流試合、選手たちとの会話を通じて障がい者に対する理解を深め、人権意識を高めて、自分の生き方を考える機会とする。 ・社会がどう変われば障害のある人々が住みやすくなるかを考える機会とする。
5 取組内容	<p>1 事前学習</p> <p>(1) 事前意識アンケートの実施・選手への質問リサーチ 体験生徒・介助生徒の選出 介助生徒への事前学習</p> <p>(2) テレビ番組「目指せ2020年のパラリンピアン」の視聴 車椅子バスケットボールのパラリンピック代表選手候補である鳥海連志選手の高校生時のドキュメンタリー映像</p> <p>(3) 事前アンケートの結果を踏まえ、ノーマライゼーションなどの言葉の意味や車いすでの介助方法など、多様性のある社会での共存についての理解</p> <p>2 車椅子バスケットボール体験（12月18日）</p> <p>(1) 介助生徒による出迎え</p> <p>(2) 校長・生徒代表の挨拶</p> <p>(3) 坂野先生（コーディネーター）より 選手紹介・競技説明・模範演技</p> <p>・車椅子バスケットボールの特性やルール・練習や試合方法などを、実際のプレイを見ながら学習した。</p>



- ・生徒は、選手の方の素早い力強い動きに驚き、歓声を上げて見入っていた。
- ・その後、実際に選手の方と校長先生を含む教員チームとで模擬試合。実践の難しさを生徒は見感じていた。

(4) 車椅子バスケット体験試合（クラス対抗）

生徒5名と選手1名の合計6名チームでの対抗戦を実施。

- ・なかなか思うように移動ができないことや、上半身だけでのシュートを打つことの難しさなどを実感しながらも、選手の方にゲームメイクをしていただき、真剣に一生懸命プレイしていた。



(5) 選手代表の体験談・質疑応答

5グループに分かれ、車座になって選手の方の話を聞いた。

- ・病気やけがなどによる障がいに至った経過や、車椅子バスケットとの出会い、普段の生活での周りの人との関わりなど、率直な話を聞かせていただいた。
- ・生徒からも、車いすバスケットの練習方法や、普段の生活における困りごと、障がいがある方に対して、こんな場合はどうすればよいのかなどを率直に質問して、双方向の交流をした。
- ・生徒たちは様々な話を聞いて、とても感銘を受けていた。



(6) 坂野先生より、障がい登録者の増加の現状などの説明

(7) 生徒代表からのお礼の言葉

介助生徒や希望生徒による退室補助、交流、お見送り。

3 事後学習

(1) 体験・交流直後に事後感想記入

- ・生徒は、選手のプレイだけでなく、その後での交流で知った生き方に、とても感動していた。
- ・何気ない毎日の大切さや、周りの人とのコミュニケーションや支え合いの力強さ、そして何より、あきらめず前を向き、できることを見つけて進んでいく強さに、自分自身の今後の生き方を重ね合わせていた。

(2) 生徒それぞれの思いを共有して、もう一度考える

- ・生徒の振り返りの言葉 より

「障がいのありなしは重要ではなく、苦手なこと、他人より劣る部分を、自分の努力や他の人たちの力を借りて、改善したり強みに変えていくその姿勢が、とても大切なことだと気付いた。」

6 主な成果	<ul style="list-style-type: none"> • 事前アンケートでは、障がい者スポーツに興味がある生徒は全体の2/3程度、実際に見たことがない生徒も同じくらいであった。今回の学習により、間近で見てプレイを体験し、その難しさや技術の裏にある多大な努力に気づき、その奥深さを実感して、もっと見てみたいという思いが強まっていた。 • 障がい者スポーツというジャンルを、一つのスポーツの種類として、純粋に興味を持ち始めた。 • 人として大切なことは、障がいのありなしに関係なく、自分の気持ちの持ち方、生き方であることに気付いた。 • 選手の方の、普段の心の持ち方や前を向く姿勢、あきらめない強さ、周りの人の支えの力の大切さを感じ取り、自分の生き方を振り返り、今後の気持ちの持ち方を変えようと姿勢に変化が見えた。 • 日常での周りの困りごとにもっと目を向けたり、声をかけたいという意識も高まった。
7 実践において工夫した点(事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> • 体験することだけに重きを置くのではなく、事前に1人の具体的な障がいのある高校生の取組み姿勢を紹介することによって、興味関心を高め、交流当日に臨んだ。 • 障がいのある方との交流は、日常ではなかなか機会がないので、少しでも近い距離で言葉を交わし、感じていることをお互いに交流できるよう心掛けた。 • 体験や、見たことだけに終わらず、その後の自分自身の生き方にまで思いをはせるよう声のかけ方を意識した。
8 主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> • 仕事を休んできてくださる選手の方への謝礼金の捻出が課題。 • 多くの方に来ていただくと、生徒との交流がより近くなり、効果的であるが、費用の面でハードルが高い。 • 競技用車いすを借りる場合の日程調整や、運送費用も課題。
9 来年度以降の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> • 次年度は、体育館の耐震工事のため改修という物理的な制約があり、実施は困難である。 • 多様性のある社会での共生をテーマに考えたとき、障がい者スポーツは一つの意識の変化のきっかけになると思われる。 • 費用面での問題も生じるが、様子を見ながら、再来年度以降でも実施を検討したい。